

川に関わる人を増やすことで、川の復権が実現できる



弘本 由香里
Yukari Hiromoto

大阪ガス エネルギー・文化研究所
客員研究員



北辻 稔
Minoru Kitatsuji
月刊「大阪人」編集長

高度経済成長から成熟社会への移行とともに、環境問題が重さを増し、また一方で「心の豊かさ」や「ゆとり」が求められるようになってきた。こうした動きに呼応して、これまでの生活や環境を見直す動きが顕著になってきている。都市環境も例外ではなく、各地の都市の再生計画において、それぞれのまちが保有する歴史的価値に再び光をあて、時間の連続性を活かしたまちづくりが行われようとしており、その中の一つに「水辺の再生」がある。

もともと日本の都市の多くは沖積平野に形成されていることから、何らかの形で水辺との関わりがあった。特に、大きな川が町の中心部を流れる、大阪や広島、福岡といった大都市は、かつて『水都』と呼ばれ、その再生の動きが顕著である。中でも大阪は、「東洋のベニス」と呼ばれていたほど、生活の中に川や水路が根付いていたが、しかし今では、その面影をうかがうことは、ほとんどできなくなっている。だが、長年に渡って水に親しんできた「大阪人」というアイデンティティに、「水」あるいは「水辺」が関わっていることは間違いない。

現在大阪市では、「水都・大阪」の復権に向けて、様々な取り組みが進められている。そこで、大阪という都市を題材にした月刊誌「大阪人」の編集長である北辻稔氏を招いて、「水」を手がかりに、水都・大阪についてお話をうかがった。

失ってしまった「水辺」の大切さを再認識する

弘本 「水都」と呼ばれる都市は、日本はもとより世界各国でもたくさんあるのですが、それらの中でも大阪は、かつて「東洋のベニス」と言われたほど、まちの中に水路が張り巡らされ、それが生活に密着していた、まさに『水の都』だった

わけですが、その痕跡は今では、大川と中之島近辺、道頓堀あたりでしか感じられにくくなっています。しかし、これまでの経済中心の社会から、環境共生や生活の質が重視される現在、失ってしまった「水辺」の大切さが再認識されてきています。「水都・大阪」の復権のために、水の都大阪再生協議会による水の都大阪再生構想「輝け 水の都大阪」時を感じる水の回廊もつくられ、これに連動する公民の諸団体によって多様な施策が進められています。また、市民発意・地域発意の水都再生に関わる取り組みも盛んになってきました。こうした

動きとその背景をどんなふうに捉えていらっしゃるのでしょうか。

北辻 高度成長期において経済都市、産業都市だけを追求してきたことへの反省があるのですが、六〇年代から都市の中に木を植えるという行為を通じて、都市に自然を取り戻そうということが、市民の中にも意識されてきた。その結果が九〇年の花博であったと思います。そして、最近の「水都再生」のさまざまな試みも、都市の集客魅力や快適性を高める狙いもありますが、飾りものではない、自然という視点から大阪を見つめ直してみようという動機があるように感じます。その奥に、都市における自然を本質的にとらえる、また都市と自然を共存させるキーワードとして、水の復権」という動きが出てきたという見方ができるのではないかと思います。

弘本 なるほど、『水の復権』は、都市空間に潤いやゆとりをという意味だけでなく、文明的にみればもっと大きなパラダイムシフトのひとつの現れということですね。都市という極めて人工的な空間の中において、生命としての人間が自然を希求するのは、当然の流れなのかもしれません。歴史的な意味も含めて、「大阪を再び水都に」という考えが出てきたのは理にかなっていると言えますね。

北辻 「花の万博」を記念して、「自然と人間の共生」をテーマとする優れた研究に賞を与える「コスモス国際賞」が設置されていますが、二〇〇一年に受賞されたアメリカのアン・ウィストン・スパーン教授は、「都市と自然は対立するものではなく、一体化した地域づくりが可能である」と主張され、都市と自然の共存という趣旨が高く評価されました。それが元で、大阪府立大学の増田昇先生に「コ・デザイン」してもらって、「大阪人」でランドスケープから大阪を見る、また自然地形から大阪の現在の風景を見るというシリーズをはじめました。上町台地、昔の大阪湾や河内湖の水際、また淀川や大和川などの自然地形に沿って樹木や街道、宗教施設などがある。大阪市内にあるさまざまな歴史風景はまた同時に自然地形を見させるのですね。大阪の元々の自然地形を見ていくと都市と自然の共生へのヒントがある、また、大阪にとっては川があることはむしろ本来の姿であり、水を通して、自然に対して都市と人間がどう対応するかを根本的に考えていくこととしました。都市の水と水というだけではなく、その背景にある自然と人間、人間が自然をどう享受していくかが問題になるのではないかと思います。

弘本 水辺が、異文化の窓口であり、豊穡の窓口であり、生命の再生の源とも捉える精神史が存在していたのでしょつね。都市と自然の関係を組み直していく、再構築していくという発想は、どちらかというと、科学によって自然の克服を目指した欧米型の近代都市をベースにしながら、脱近代のムーブメントの一環とした

て生まれてきたのではないかと思います。しかし、それとは違う都市像のようなものが、前近代の日本の中には既にあったのでしょつね。たとえば幕末の大阪を訪ねてきた西洋人たちが、田園的な都市が存在していることについて驚きを示した。都市と自然が共生している姿を見て感激したわけですが、それは水が豊富にあり、緑も豊かな、土と木でできた非西欧型の実に美しい都市が実在していたことに対する驚きだったのではないかと思います。循環型・共生型の住環境や都市環境が、自覚していたかどうかはともかくとして、歴史的に長く存在していたという違いが、日本の都市と西欧の都市との間にあるような気がします。

水の循環を求めるとは、人の魂の循環にもつながる

北辻 私は、水の循環を考えることは、人の魂の循環につながると思っています。流れた川の水が海で蒸発して雨となってまた山に降る。山への道は川や谷に沿ってつくられる場合が多いのですが、山に登るといのは、つまり水の循環を逆に訪ねる旅のように思います。山の奥に入っていくにつれ、人も自然の一部だなどと実感しますが、その自然の循環の中で、人の魂も再生されて、また元気になる帰ってこられると思っています。

弘本 「水」の循環と、人の「魂」の循環ですか。都市の水辺は、時空を超えて生命の循環にアクセスする回路でもあるわけですね。

北辻 金剛、吉野、大峰、熊野、また北部方面の山々もあつたと思いますが、大阪市の中の都市民とその周辺山岳との関係はかなり強くあつたのではないでしょつね。都市に翻弄されながら生きる都市民の弱まった魂、生命力といったものが山に登ることによって再生される。昔から熊野詣や大峰山修行に盛んに出かけたのには、そういう意味があつたのではないかと。都市と山岳の往還で都市民は生命力を維持・発展させてきた。つまり、大阪市中とこれらの周辺山岳は生命の「コスモロジー」を形成していたのではないかと。そういう精神構造が潜在的にも出来上がっていたのではないかと思うのです。それが水の循環と対峙している、水はまさに人間を生き返らせるものであるし、そういう観点から、都市と自然都市と水の関係がとらえられないかと思えます。毎日飲んで水道の水が比叡山に落ちた雨水の一滴が入っていると実感できる想像力が必要なんですね。

弘本 都市の祭を代表する「天神祭」も、川が重要な役割を果たして、夏を無事に越えられるように災厄を払うものですし、祇園祭も、もともとは疫病等の被いで、穢れを川や海に流すというところから始まっている。鎮魂・厄除けの祭りです。そういうことを考えると川が持っている浄化力が重要な要素になりますね。魂も浄化するし、様々なものを浄化する。広い意味での都市生活を支えるための主要な軸として、川が都市空間に位置付けられ、生活者の心の中でも意味づけられていたのじゃないかな。それを遡っていくと、霊山があり、そこに降る雨が降り、雨を吸い上げる木があるというコスモロジーができていくわけですね。

北辻 山に行くことと浄化されるのと同じように、昔は、生活の折衝で水による浄化が実質的にも象徴的にも意味を持っていました。例えば、四天王寺の亀井堂ですが、取材などのときそばで見ただけだったのですが、私も先日ふと思いついて、二〇数年前になくなった父の供養だと思ってやってみたのです。鐘撞堂で経木を買って、先祖代々なども追加して名前を書いてお経あげてもらって、そのあと、亀井堂の井戸に流してもらった。長い柄杓で重くなった経木を散らせて水の奥のほうに沈める。それを見ていて、何か胸がキュンとなるものがありました。ただ単にお経だけではそんな感動はないのですが、水の威力ですね。何か、父の人となりというが、霊というかそんなものが見えたような気がしました。まあ、それで供養されたということでしょうが、気持ちが一掃しました。水というのは生命維持の不可欠な物質であると同時に、精神的にも本質的な要素、メタファーとして、心のありようを潜在的に支えているところがありますね。

人間の持っている原始性を還元できる都市づくりを

弘本 日常の中でも日が昇り日が沈み、季節が巡る、自然の大きな循環は、計り知れない喜びや安らぎや希望をもたらしてくれるものだと思います。都市にあってても、自然を身体で感じるのが不可欠だということだと思つのですが、科学的な数字と言語によってつくられる近代的な計画に身体的な感性をどう取り

込んでいくか。そのへんについてはどうお考えですか。

北辻 一番の原点は文化と自然の関係で、自然が文化に取り入れられる以前に戻るといふか、自然そのものと直接反応できる感覚をもてるかということだと思います。ところが今は、文化にされた上での自然になっていて、言語化できるし、表現もできる。私は「二〇数年、地理学者で文化人類学者の岩田慶治さんの本を何度も読み返しながら、山登りの中で自然への感性についていろいろ考えているのですが、アニミズムといふことなんですね。岩田慶治さんの本の中で一番印象に残るのは、「万物照応の世界」と「同時共存の世界」ということで、『即』といふことを空間と時間の軸で言い表しているのですが、因果で説明できる世界でなく、即わかるということなんです。東南アジアの少数民族の中にはいつか長い期間一緒に暮らしながら調査を続けてこられたのですが、ある部族の一人と話していて、その人が、吹き矢で鳥を射たのですが、吹き矢を吹いたことと鳥がパタッとしたことが同時にあった。矢が飛んで鳥に命中して死んで木から落ちた、と因果関係で説明できるようには見えなかった。私も小さい頃タルマ落して、木槌で叩き抜くのと上のタルマが落ちるのが同時に、その不思議さに熱中したものです。あの面白さは、『即』ということだったのかと思いついています。我々は観念を積み重ねてわかったということになっていますが、それは単に説明であって、わかるというのはいくらも根源的なところにあるのではないか。また別の部族では、サゴヤシの実をとるのに、サゴヤシの木の下で実が熟して落ちてくるまで何日も待つ。彼らにとっては実が落ちてくる時の一瞬しか期待していないので、何日そこにいる時間も時間はないに等しい。それも、『即』の時間感覚で、物理的な長さは関係していない。そういう感覚がいろいろなものに神が宿るといふアニミズムの自然観を発生させたのです。アニミズムといふのを仏教やキリスト教のような宗教とくらえないで、宗教以前の、あるときは命をかけるを得ない自然の中で生きる人々の知恵でもあるし、そういうふうに見える自然観、感覚なんですね。それともうひとつは、彼らの生命を守り、あるときは害を与える悪魔でもある神々が生活の周辺にいる。稲の霊は稲作の作業とともにあり、おろそかにすると被害をもたらすし、丁寧に扱って収穫を増やしてもくれる。人が死ねばその霊が山に行き、雨とともに大地に降りてきて、人々を守るとか、その部族が神とともに生まれたといふ。彼らの国が生まれ

る起源を物語る神話をどの部族ももっている。彼らの生存が大地と天空、自然とともにあるというコスモロジーをもっているということなのですが、このアニミズムの感覚とコスモロジーを形成する神話が有機的につながっている。それが自然を人工的に開発していく文化が発達してくると、自然が文化の文脈の中でとらえられ、アニミズムの感覚も薄れ、コスモロジーも解体されてくるのです。近代は地球規模でそのような「原始感覚」を解体してきた、ともいえるでしょう。



弘本 自然から遠ざかることが文明だと錯覚してしまっただけですね。

北辻 しかし、そのようなことは文明が始まってここ数千年のことで、現生人類発生の三万数千年からいってごくわずかの期間です。その意味で我々現代人でもその根底にまだ「原始感覚」を残しているはずで、忘れていただけだと思います。自然と直接反応するというのは、その忘れかけているアニミズム的な感覚を取り戻し、自分の足で歩いていける範囲で確かめられるコスモロジーを築いていくということだと思います。

弘本 自然と人間との関係に関わるコスモロジーの構築は、私たちが生きていくために必須の目に見えない社会関係資本のひとつなのかもしれません。しかし、水辺から生活を遠ざける安全や衛生の思想は、結果として自然に対する感性や防災力・生活力をも弱めてしまいました。

北辻 この前の台風や地震の災害を見ていると、やはりまだまだ自然は怖いもの、人間は自然を完全にはコントロールできないものだと思いますね。大阪南部や奈良などの山によく登りますが、そんなに高くはないですが山奥に入っていくとだんだん怖さを感じてきます。道に迷うことの怖さもあるのですが、うつそつと茂る樹林の中にいると漠然とですが恐怖心が募ってきます。木の根がうねつねと横たわっているのが蛇に見えたり、風もないのに木の葉がゆれたり、ちよつとした物音でもドキッとすることがあります。自然というのは怖さと隣り合わせだと実感します。太古の時代では狩猟や採集生活を通して命をかけて自然と向き合わなければならなかったのですが、それとは比べ物にはならないで

しょうが、山へ行くときはそれなりに覚悟はして行きます。いつも思いますが、山に登っていくとやはりかなりしんどいときがある、しんどいと言いながらもほんの数秒立ち止まっただけで、自分の意思とは関係なく足がまた勝手に動き出す。水を飲み、汗をかき、息も絶え絶えになりながらも登っていく、そうするとだんだん気分がよくなってくる。水まみれ、汗まみれになって、なんと一言つか山まみれになって、山と一体になっていく感じがするのです。まみれて、一度俗界を打ち捨てるといって過程があるのです。もちろん単純には原始の感覚に到達することはできないでしょうが、その糸口を感じることはあるのではないかと思います。そういう自然に対する感受性をもつことが基本かなと。その基本から都市と自然の関係を見ていくことが必要かなと思います。

弘本 自然に接し自然への感受性を育むことができる空間軸や場を都市計画やアーバンデザインのなかにも、何らかの形で担保する知恵が必要とされているということですね。そういう合意を持つべきだと。そしてそれを生み出すきっかけになるのが、「水辺の再生」であるということですね。水都を本格的に再生するには、それこそ百年の計、十年の計の都市ビジョンが必要だと思いますが、今はその合意づくりの気づきの時期に相当するのかもしれない。

北辻 先ほどの四天王寺の亀井堂などもそうですが、長い間人々の水への思いが脈々と引き継がれている例がありますね。寺社や古風な庭などがそうですが、法善寺なんかは、いろんな願いをもって水掛不動さんに水をかけるのでしょうが、不動さんの石仏にこびりついた苔の分厚さは圧倒的です。よくもこんなにと感動しますが、法善寺横町の石畳はいつも水が打たれていて濡れている。あそこは水への思いというのが格別にあるように思いますし、そこを訪れる人にも何か安らぎを感じさせてくれるものがあります。現代の例では、空中庭園のある新梅田シティなんか面白い。阪急の梅田からJRのコンテナヤードの地下道を抜けて、中自然と呼ばれる雑木林を廻る。噴水が幾つも岩に沿って上に噴出させているのですが、「逆流の滝」といいますが、目の錯覚を楽しむところがあって、見ていて飽きない。それで一回りして、サッと空を見上げると空中庭園の丸い輪が浮かんでいる。地下道から中自然の地上の森に入り、天空へと至る、水の流れとは逆に、地下の根の国から天空のあの世へと上昇していく一つの神話の世界を感じさせるものがあります。ただ造形的に装置の中へ水を取り入れるだけでは水への親和性が生まれず、というか心が動かない。何か心が直接反応するか、スピリチュアルなストーリーがそのバックにないと繰り返し人をひきつけられないでしょうね。

民間の活力を積極的に導入して「水都」の再生を図る

弘本 大阪のまちの中でのスピリチュアル・デザインの事例が出てきたところで、これからの具体的な仕掛けづくりの可能性についてうかがいたいと思います。まずは、「大阪人」の編集を通して、大阪を見つめ続けてこられて、今の大阪をどうお感じでしょうか。

北辻 「大阪人」という雑誌はビジュアル志向で、文章も大事だと思えますが、それと同じくらい写真や図版も大事だと思っています。一〇〇〇の文字に匹敵するくらいの情報や価値観を一枚の写真が伝えることができるのではないかと、その方が読者にとってわかるという場合があるのではないかと。どんなテーマのときも、その歴史を取り上げる場合が多いのですが、それも歴史学にならないでその時代を生きた人々の率直な感想、個々の物に即した歴史やいわれなど、実感を引き出すような取材や文章を心がけています。観念や知識で分かる、確認するといつよりも、写真やエピソードなどをきっかけに何かを思い出します。その記憶の底にある感覚をよみがえらせる、ということが大事だと思っています。一方、文化振興財団機能として、新しい文化振興事業のあり方を追求していますが、大阪には才能をもったアーティストやそれをサポートしたいという志向をもった若い人がかなりいることを実感します。しかし、大阪にはそれを表現する場があまりなくて東京や他にその場を求めて流出するということがあつて残念です。大阪で創造拠点を作り、アートマネージャーを育て、ネットワークをつくっていく、いわば、表現者が育っていく良好な芸術環境というものをつくっていくこととしています。企画とかアイデア、やる気といったものは現場から浮かび上がってくるもので、純粹さを失わずに具体的な形、つまり事業化や予算化していく、というのが仕事です。そういう受け入れ体制といつか、きわめて細やかな議論の積み重ねで展望を見出ししていく、現場と公共側のきめ細かな話し合いのシステムをつくっていくということなんです。何もないとこから事業が立ち上がってくるのはダイナミックですよ。新しい施設がつかれないと

いつ時代ですから、フェスティバルゲートや築港の赤レンガ倉庫などの遊休施設を活用する、既存の施設を芸術文化の事業で活性化させるということが中心で、少ない予算で場所を選ばず、いろんなことができるものです。その様子を見てみると、大阪の人間というのはきわめて感覚的で、情念的です。まあ、現生人類の原始感覚をまだまだ忘れずもっているという感じですね。

弘本 原始以来の人間の魂の再生と発露の場を造ろうということですね。

北辻 遊休施設やぼったらかしの空間というのは何か原始の感覚をくすぐる、何か独特のにおいがあるようです。精華小劇場もそうだし、最近小劇場がいくつか出来上がっていますが、どれも再利用です。倉庫であったり、ビルの地下であったり、ガード下であったり。また、大阪にも戦災に会わなかった町家がわりとあるのですが、若い人たちはそんなところに目をつけて、カフェやギャラリーをつくったりと、単にブームとはいえない、人々の中にある、古さに新しさを発見する「古層の脳細胞が活性化しているように感じます。」

弘本 海辺の倉庫や造船所跡の創造拠点としての活用をはじめ、水辺にはポテンシャルの高い空間がたくさんあります。異他が交わる場の系譜が、根強く生きてるように思います。水の都大阪再生協議会の、時を感じる水の回廊づくりでも、道頓堀川は、道頓堀、なにわの水辺劇場の創出、東横堀川は、船場都心、うるおいと楽しみの環境創出、中之島は、水とみどりが活きる国際創造環境としての川の価値に着目しています。ただ、「水都再生」というと、どうしても河川管理者である行政の責任領域が多いわけですが、実は多様な人々が関わってこそいろいろなアイデアが生まれてくる。川がなぜこんなに寂しくなってきたのかと、関わっている人が限られてしまったという近代以降の歴史があると思います。行政に治水管理を任せただけになってしまった。しかし、「ここにきてやっと環境問題に向き合い、親水性も重要だということ」で、環境と治水と利用の観点から川のあり方を考えようと河川整備計画の見直しも始まっています。水運が衰退して以降、生活者と川との関わりは極端に単調になってしまったわけですが、今、川と生活の関わりを考え直す中で、かつての水運に変わる新たな産業としての川を生かした生業を育てていく時期に来ているのではないのでしょうか。そこに実際に動き始めている人た

ち、NPOの方たちが登場してきています。例えば、水辺のまち再生プロジェクト「水辺ランチ」のキャンペーンをはじめ、ユニークな活動を展開しています。何が生まれてきそうな場所を生活シーンから選んで、紹介し、利用者を増やして行く。そういう例が増えることで情報を得て、さらに川に関わる人たちが増え、その過程で、川の姿は多様になり、川の命が蘇ってくるのではないかなと思います。

北辻 大阪のような大都市のと真ん中を、これだけ大きな川が流れているのは世界的にも珍しいと思います。また道頓堀川のように、繁華街の中に水路がある都市はあまりないでしょう。川が少なくなつたというより、まだ街の中に川が残っているという、希少価値を再発見するということのように考えた方がよいでしょう。道頓堀の周りを水で再活性化しようという話とか、いい動きだと思いますが、宗教家や庭師、精神療法の先生とか、芸術文化関係のNPOとか、もっと多様な人が加われば面白いと思います。

弘本 公民協働(大阪府と水辺のまち再生プロジェクト)の実験として、二〇〇四年の秋、天満埠頭で九日間だけの川のターミナルも開設され、水上タクシーの実験運行や水上カフェ&バーも仮設で開かれました。大阪21世紀協会をはじめ行政やNPOで構成する「水都ルネサンス大阪」実行委員会でも、同様に

川を舞台にした多彩なイベントを展開していますね。こうした協働の動きが市内のあちこちで活発化してきています。今までは水上交通も限られた事業者だけの運行でしたが、そこに水都再生の流れの中で新しい事業主体が実験的に入ってくることで、刺激や活力を生むのではないかと期待しています。法的な調整は行政の専門分野ですから、そこは頼りにしていきたいわけですが、川の利用のあり方は、川が持っている公共性、公益性は何か、市民にとつてどういう意味があるのか。それをどう理解していくかということ、可能性は大きく広がっているものだと思うのですが。

北辻 「大阪人」も、そういう動きの一助になるように、様々な機会を通じて、今後歴史から現代にいたる都市の魅力や才能溢れる人たちの動きについて発信していきたいと思っています。また、文化振興事業というのは、単に文化事業の催しをするのではなく、都市を芸術文化の手法で開発していく、都市活性化のシステムづくりだと思っていますので、その手法はどこかで役に立つのではないかなと思います。

弘本 そうした動きが、やがて「水都・大阪」の真の復興につながっていくでしょう。百年の計千年の計で、時空を越えた遠大な視点と目の前の取り組みが繋がってきました。今日は、お忙しいところ、長時間にわたって面白く貴重なお話をいただきました。ありがとうございます。

北辻 稔 (きたつじ・みのる)

財団法人大阪都市協会文化事業部長、月刊「大阪人」編集長

76年九州芸術工科大学画像設計学科卒業、78年京都工芸繊維大学大学院修了。大阪市広報課、大阪都市協会勤務を経て2001年より現職。長年広報誌、文化情報雑誌の編集にかかわる一方、大阪市における芸術文化による都市の活性化のための事業を積極的に推進している。

弘本 由香里 (ひろもと・ゆかり)

大阪ガス エネルギー・文化研究所 客員研究員、立命館大学政策科学部非常勤講師

84年筑波大学芸術専門学群卒業。住宅建築専門誌「新住宅」編集員を経て92年より現職。研究領域は、生活者の視点からの住環境・まちづくり・文化政策など。主な著書に、『なにわ考 大阪の歴史と文化を探る』(共著、KBI出版)、『大阪 新・長屋暮らしのすすめ』(共著、創元社)、『自治都市・大阪の創造』(共著、敬文堂)などがある。



撮影協力:graf